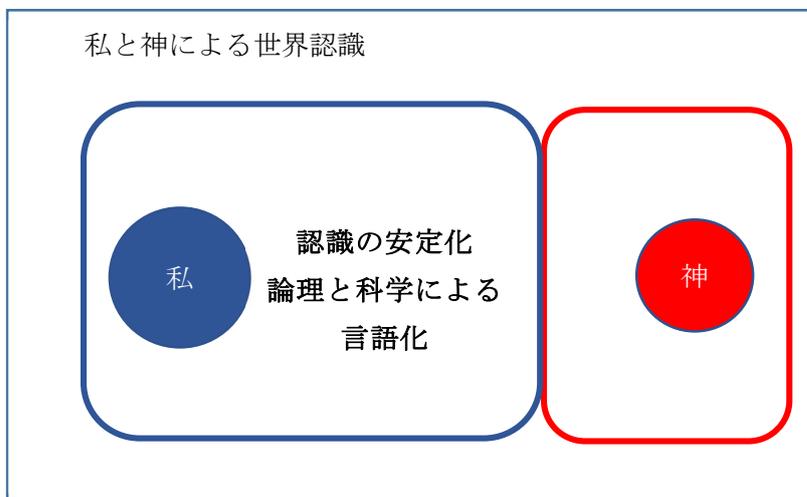


第7章 世界の拡大

世界が出来上がると、その中の認識の共通化が格段に進むことになる。

世界の中の認識も安定化し、この安定が論理と科学を生み出す。

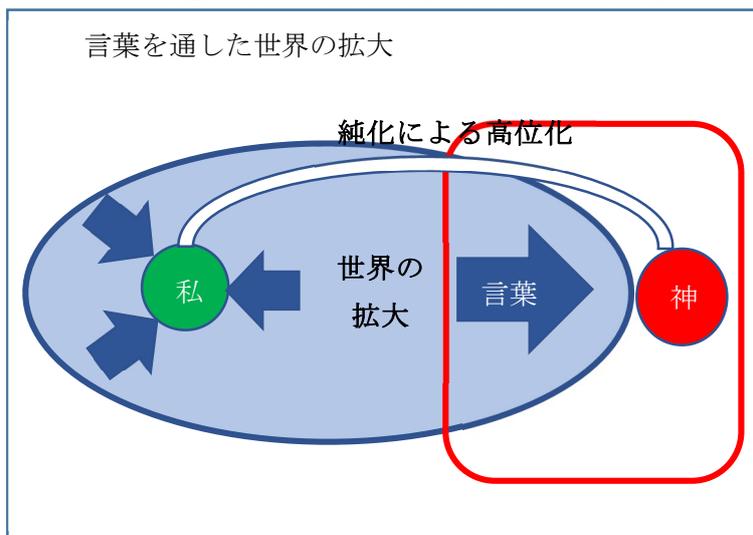


そして、論理と化学は、認識の安定を追いかけ、世界を拡大させる。これは人の万能感を拡大させ、世界に対して高位化することにもつながる。

そして言葉が、世界を人の実体の認識を、超えて拡大させる。言葉による認識の限界まで、拡大することになる。この世界の拡大は、神の領域が遠くなることになるが、神自身は、高位化をもたらす。そして対応するように私も縮小し、私の高位化（人が最高であること）をもたらす。

第7章1項 世界の中の変化

世界が出来ると言葉も世界の中で、ある程度安定的になる。そして世界の中では、認識の強弱が、より問題になり始める。特に言葉は、認識される実体との関係が、重要なため、問題が関係の強弱に集中することになる。



私が集団的な活動を強めると、集団も拡大を始める。

そして言葉が、その拡大を推し進める。集団が拡大し、言葉が集団に付与され、区別され階層化する。

また世界も、言葉により区別され階層化する。この区別と階層化は、神の領域にも及

ぶことになる。

第7章2項 論理と科学

言葉が、認識対象に対して安定的になると、人と人との間の会話などを通して、言語での思考が、大半を占めるようになる。言葉は、それ自体に実体がないので、関係の強弱が、より問題になる。そして時間に対する関係の強弱は、関係の安定を通して、論理と科学が成立する。

論理と科学は、言葉と言葉や、言葉と実体の関係の安定性を追って拡大する。そして論理と科学は、私の実体の認識を超えて、言葉同士の安定性を追って拡大する。

第7章2項補足 0、無という関係

理論と科学は、0や無を、関係性の強弱からつきとめた。混沌を、領域的に表現すると空（空も仏教用語で厳密には違っている）に近い。そして無限は、無を使っているのかかわらず、言葉的に中間的である。ここでは、のちの章で無限を使っているが、いい言葉がないので使っているに過ぎない。

日本語は、この違いを厳密に区分していない。

また第1章や2章では、関係に無も入っているが、3章以降は、有の関係を中心にしている。これは、生物が物質に依存するため、認識が有に偏るからである。

しかし、最後でこの無のあいまいが、世界の構造化に大きくかかわるので、造語せずこのまま使うことにした。

第7章3項 科学と神の共同作業

論理と科学は、の私の領域を、世界の言葉に置き換える。私と神は、世界の拡大に伴って、区分され私単位での同化が難しくなる。

また人と神は、領域の縮小に伴って、純化する。

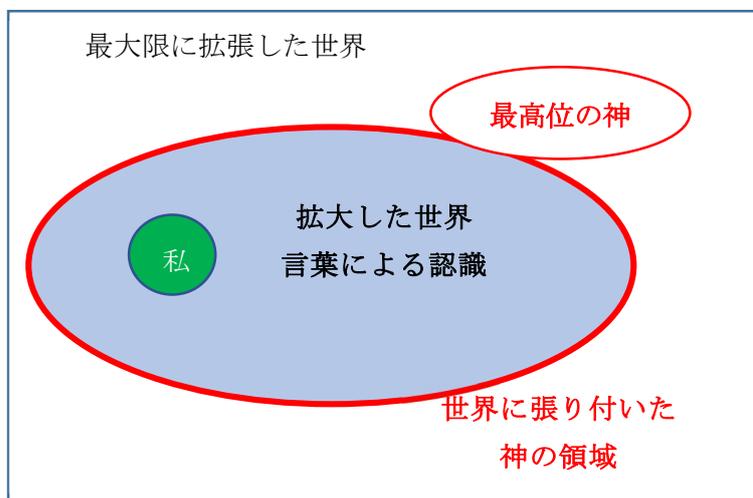
人が世界に対して高位になるとともに、神も高位化する。濃密になり高位化する。人が、世界を論理と科学で解明することは、世界に対して高位に立つことである。これに伴い、神も世界に対して、高位になることになる。

私も帰属集団が言葉によって区分され、帰属集団からの退却が起こり、より純化して自己と強力につながるようになる。

この関係は、すべて関係の安定と強さを求めた結果である。人と神は、自己の安定と強化のため、強力な内部関係を求めて縮小する。世界は、論理と科学を使い、より安定的な関係を求めて、拡大した結果である。

第7章4項 世界の拡大の末

世界が実体の認識を超え、言葉の認識の限界まで拡大すると、神の領域は、なくなり世界の外側に境界として張り付くようになる。そして最高位の神が残る。



世界は、論理と科学により、関係の安定と強さが圧倒的に強くなる。そして私は、自己と同じ領域になり、共同体と区別されるようになる。

神の領域は、無くなるが、私のほうは、感覚としての認識がある為、私が自己と同じ大きさで、縮小が止まることになる。

私と神以外の、言葉による認識できるものは、全て世界に統合される。

それでも神と私は、同化することができる。神と私の関係の最終形として、人権が神から贈られることになる。

第7章4項補足 人権

権利は、どうしても付与する対象と、付与された対象が、必要だと思っている。

授与された対象が私ならば、私と対の関係にあたる対象で、最高神から付与される権利になる。

したがってこの権利の使用条件は、私と神との関係において、履行する権利になる。私と他者(世界に属するもの)との関係の履行には、問題が起こることになる。私の為の権利を、私の認識を基本に、執行することになる。そして私を中心として、私からの関係性の強弱で、階層化が起こる。そして他者の権利の階層と衝突し、お互い相入れない権利になる。

基本的に権利は、完全な履行を目指そうとする。そして権利の完全な履行により、権利として消滅し、前提にならなくてはならない。

この権利は、いつまでも権利として意識されるが、完全な履行はできないことになる。いつまでたっても、完全な履行は出来ず、世界の中の力関係で、決まる権利になる。